

宮城県名取市手倉田遺跡出土の弥生土器

太田 昭夫

1

手倉田遺跡は、十三塚遺跡の立地する丘陵の先端部にあり、宮城県遺跡地名表（宮教委：1976）では十三塚遺跡の中に包括されている遺跡である。10年前に、市営の仮設野球場として遺跡の大半が整地された。ここに紹介する弥生土器は、その整地された地点から採集したものである。

2

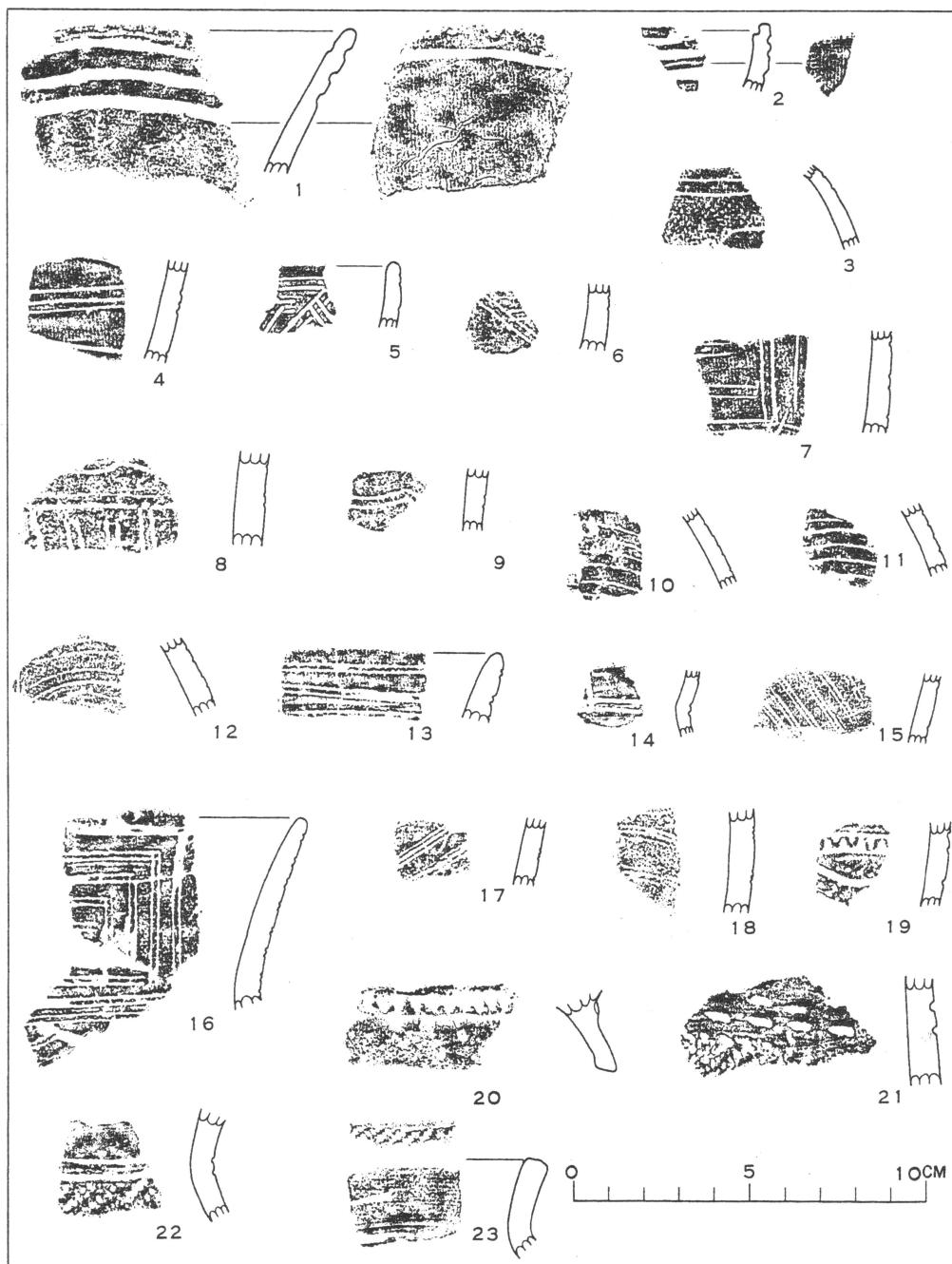
採集された弥生土器は、主に文様の特徴から8類に分けられる。

第1類(1, 2)は太い籠描き沈線によって文様が描かれているものである。ともに口縁に沿って、外面は数本の、内面は1本の沈線文が施されている。沈線の溝幅は3~4mmである。これ



に類似するものは十三塚遺跡からも出土しており(太田：1979)，福浦島下層式(伊藤：1966, 1969)に相当するものと考えられる。

第2類(3)は磨消繩文によって文様の描かれているものである。沈線の溝幅は1 mmである。繩文の原体はLRである。細い沈線と磨消繩文手法からみて楕形団式(伊東：1955)に近いもの



手倉田遺跡出土土器

と考えられる。

第3類(4)は細い範描きの沈線で横方向の文様が描かれているものである。沈線の溝幅は1mmである。これは楕形囲式(伊東：1955)か円田式(伊東：1957, 伊藤：1966, 1969)に相当するものと考えられる。

第4類(5～16)は2本平行施文具によって、連弧文、同心円文、格子目文、山形文などが描かれているものである。沈線の溝幅は1～2mmで、2線間の距離は1.5～4mmとややばらつきがみとめられる。これらは桜井式(伊東：1955)、十三塚式(伊東：1957)に相当するものと考えられる。

第5類(17, 18)は3本平行施文具によって文様が描かれているものである。沈線の溝幅は1mmである。これは、第4類とともに十三塚式とされているものに類似している(伊東：1957)。

第6類(19)は刺突波状文が描かれているものである。その下位にはLR縄文の施文後、太目の沈線文が施されている。これは刺突波状文などの特徴から天王山式に相当するものと考えられる(坪井：1953)。

第7類(20)は高杯の脚部の一部とみられるもので、脚部の上位に下方向からの刺突が連続的に施されている。高杯形土器は天王山遺跡でも出土しており、その中には脚部に刺突の施されたものもみとめられる(坪井：1953)。これから本類も天王山式に属するものと考えておきたい。

第8類(21～23)は甕の破片とみられるものである。21は頸部に2段に列突刺突文が施され、体部にはLR縄文が施されている。22は頸部に横方向に2本の沈線文が施され、体部にはLR縄文が施されている。23は口縁端部にLR縄文が施されている。これらについては時期は限定できない。

3

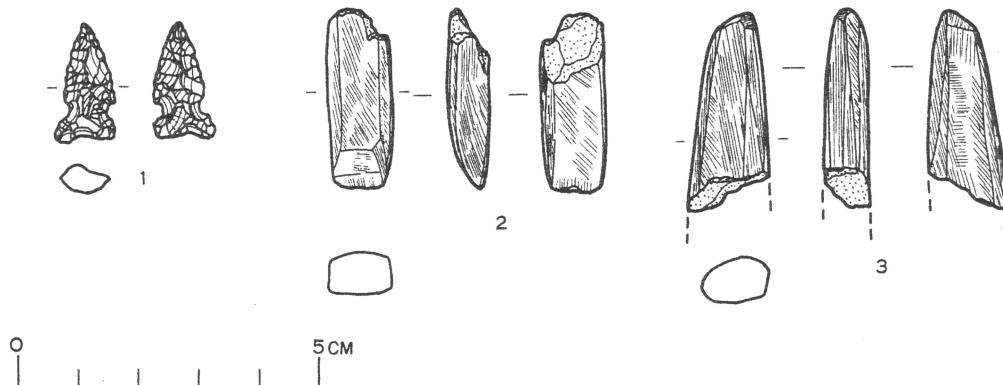
最後に第4, 5類について若干付け加えておく。第4, 5類は伊東信雄氏によって桜井式(伊東：1955)、十三塚式(伊東：1957)と型式設定されたものであり、これについてはその後、佐藤信行氏(佐藤：1967)、中村五郎氏(中村：1976)、馬目順一氏(馬目：1978)等によって細分が試みられている。その中で、平行施文具による文様において、2線間の距離が次第に狭くなること、時期が降るとともに2本から3本へと多条化の傾向がみられることなどが指摘されている。名取市内やその周辺からは、第4類のような2本平行施文具によって文様の描かれる土器が比較的多くの遺跡から出土している。これらには、本遺跡と同様に2線間の距離に多少のちがいがみられる例がある。また、第5類のような3本平行施文具によって文様の描かれる土器もいくつかの遺跡から発見されている。しかし、これらの資料はすべて断片的であり、これらが時

期差によるものかどうかについては、なお今後とも類似資料の増加を待ち、検討していく必要がある。

引用・参考文献

- 宮城県教育委員会(1976)：「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
太田昭夫(1979)：「宮城県名取市十三塚遺跡出土の弥生土器」『糸』創刊号
伊藤玄三(1966)：「東北」『日本の考古学』Ⅲ
伊藤玄三(1969)：「東北」『新版考古学講座』第4巻
伊東信雄(1955)：「東北」『日本考古学講座』第4巻
伊東信雄(1957)：「古代史」『宮城県史』第1巻
坪井清足(1953)：「福島県天王山遺跡の弥生式土器—東日本弥生文化の性格」『史林』第36巻第1号
佐藤信行(1967)：「山形県江俣弥生式遺跡」『古代』第48号
中村五郎(1976)：「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』
馬目順一(1978)：「入門講座・弥生土器—南東北4—」『考古学ジャーナル』No.156

弥生時代石器集成 1



名取市高館字南台・北台・鴻ノ巣に所在する今熊野遺跡から発見されたものである。

アメリカ式石鏃(1)：石質は黒曜石である。全面に調整剝離が施されている。

ノミ形石斧(2, 3)：2は頭部が欠損している。全面に調整痕とみられる擦痕がみとめられ、刃部は片刃に作られている。刃縁にはわずかな剝離と縦方向の細かい擦痕がみとめられるが、使用痕かもしれない。3は刃部が欠損している。全面に調整痕とみられる擦痕がみとめられる。

(太田昭夫) 実測者、保管者とも太田昭夫。